

性格とまつり」の中で信濃においては片刃箭式の鏝は古墳時代終末期に近い古墳からの出土としており、以上のことから38—2～8は7世紀中葉～後半以降に作られたものと考えられよう。

轆について、第7号古墳玄室内出土の38—10・11は鏡板が円環式であり引手・銜共に断面形は楕円形であった。佐久市内で円環式轆は大沢小学校敷地より2点、前山西東古墳より1点、跡部尽田古墳より1点、百染古墳より1点の既出資料があり、1976年佐久市教育委員会によって調査された家地頭第1号古墳より断面形が方形の円環式轆が出土している。また良好な資料として小諸市与良芹沢（堰下）古墳より3点円環式のものが出土している。以上轆においても実用性が強く、装飾的色合いの馬具が副葬されていないことは終末期の轆と考えられよう。

土器について、本古墳は石室内の出土が極めて少なく、第5号古墳28—4以外は小片であり、後期古墳の副葬品としての特徴を表わしている。ここで特筆されるのは、第8号古墳IV区墳麓に散在している須恵器の出土状況であり、この類例としては、下前田原古墳群第1・2号墳の出土状況が似ている⁽³⁾。また、外周列石の形状にも類似性がある。

その器形については第8号古墳の項に記してあるが、個体数約40個以上を数え、器種には長頸瓶・短頸瓶・甕・坏・蓋等がある。坏底部の形態から回転ヘラキリの後再調整の45—22・23、回転ヘラキリの後、底部周縁ヘラケズリの45—25・26、回転糸切りの45—27・28・29の3形態が共存しており、蓋においても、つまみ部皿状でかえりを有する45—32、つまみ部皿状でかえりを有さない45—34～37、平扁な器形でかえりを有さない45—38、つまみ部宝珠形の45—39・40と4形態に分類でき、これらは所産期を異にするものであり、それらが共存していることは、第8号古墳は7世紀末から9世紀初頭にかけてなんらかの目的を持って使用されたことを促すものであり、盗掘をうけていることから追葬の確認はできなかったが、器種構成の上でも、土師器が45—41の高坏のみであり、煮沸用土器の出土をみないこと等から継続的に墓前祭を行ったと思われる今後の問題にしたい。

次にこれらの須恵器の搬入経路を類推した時、全国的流れとして7世紀後半には地方窯が出現する時期であることから、胎土・粒子等を観察した所、長頸瓶44—2・3・4、甕44—21等は暗赤灰色～暗青灰色と暗く、ガラス質の黒斑が付着しており石附窯址⁽⁴⁾の出土須恵器と類似性が認められ、北御牧村八重原の古窯址とも考え合せ今後の問題にしたい。また、胎土灰白色で粒子細かく、緑がかった自然釉の付着している美濃須衛産の長頸瓶が第6号古墳墳丘から20—1、第8号古墳IV区墳麓から44—1、それと器種不明の破片が第6号古墳玄室内棺床面から出土していることは、美濃須衛産が佐久に入ってきていることを物語るものである。なお、8世紀以降の佐久では、土師器甕において「武蔵型」の甕が主流を占めるが、須恵器蓋のつまみ部皿状でかえりのない45—33～37と類似している蓋が南多摩窯址群M1号窯で焼かれており、M1号窯址の土器を8世紀第II四半期の土器としていることから、土師器甕同様に関東地方のつながりを知るよい資料と言えよう。

以上、長峯古墳群の五古墳について、遺構・遺物について考察してみたが、古墳築造の年代を決定するには至らず、構造上から7世紀以降、遺物から古墳時代終末期まで被葬（追葬）され、なんらかの形（墓前祭）等によって9世紀初頭まで使用されたのが長峯古墳群の性格と位置づけたい。

註(1) 田中正夫・瀧瀬芳之 1983 「第2章 埼玉における古墳出土の鉄鏝の基礎的型式分類と年代観」『研究紀要』

註(2) 中村 浩 1985 「須恵器による編年」『季刊考古学 第10号 古墳の編年を総括する』

註(3) 土屋長久 1975 「祭祀ある古墳の一例—下前田原古墳群—」『信濃佐久平古氏族の性格とまつり』

註(4) 佐久市教育委員会 1981 『石附遺跡発掘調査報告書』

第3節 長峯古墳群周辺における後期古墳について

佐久市において、古墳時代後期の古墳及び古墳群と思われる分布を佐久市遺跡詳細分布調査報告書から見た時、地形から大きなグループとして6つに分けてみた。

A群—平尾山山系に位置する古墳・古墳群。横根古墳群、平古墳群、矢口古墳群、矢沢古墳群、城古墳群、丸山古墳群。

B群—志賀・香坂川流域に位置する古墳・古墳群。瀬戸狐塚古墳群、屋敷古墳群、中条峯古墳群、氏神古墳群、入久保古墳群、小倉塚古墳群、本郷古墳群。

C群—滑津川流域に位置する古墳・古墳群。東久保古墳群、東姥石古墳群、月崎古墳群、西和田古墳群、長峯古墳群、大間古墳群と点在する7基の古墳。

D群—塚原泥流によって「流れ山」の形成される平坦地の古墳・古墳群。藤塚古墳群、姫子石古墳群、家地頭⁽¹⁾古墳群、大豆塚古墳群、下大豆塚古墳群⁽²⁾、東池下古墳群、鷺林古墳群。

E群—湯川の下流、河岸段丘上に形成された古墳・古墳群。上鳴瀬古墳群、北西ノ久保古墳群⁽³⁾、東一本柳古墳⁽⁴⁾。

F群—中沢川流域の古墳・古墳群。釜塚古墳、墓陵古墳、坪ノ内古墳。

その他、上記古墳、群集墳より先行する6世紀から7世紀初めの築造と考えられる、大型の単独墳が安原大塚、三河田大塚等として点在している。群集墳は千曲川に注ぐ支流に集中し、規模は径10m以下の小円墳が多く、10基内外の小グループを作り、特に東部山麓に集中する傾向が看取できる。また、群集墳とは離れ東一本柳古墳、⁽⁵⁾皎月古墳、F群等散在的に分布している。しかしながら調査墳が少なく、集落址・生産地・所産期・変遷等今後の問題にしたい。

その中で、本調査の長峯古墳はC群に属し、上記の古墳群の他に塚田古墳、観音堂古墳、松井東古墳、萩元古墳、下屋敷古墳、上屋敷古墳、後家山古墳等昭和33年の調査によると約43基の古墳が確認され、後期古墳の密集する地域である。今までに調査されたのは、昭和42年佐久平ゴルフ場古墳群調査により、東姥石古墳群より6基、月崎古墳群より16基が確認され、いずれも盗掘されており、径6～10mの小円墳の横穴石室を有し、石材は地元から産出される溶結凝灰岩が主に使用されていたと報告されている。昭和49年平賀後家山古墳が調査され、径17.4mの横穴石室を有する円墳で、副葬品として直刀片⁽⁵⁾・鉄鏃⁽⁶⁾(12)・刀子⁽²⁾・耳環⁽¹⁾・切子玉⁽⁸⁾・勾玉⁽⁷⁾・ガラス小玉⁽¹¹⁾が出土し、平賀地区古墳群の中核的存在を示していると報じ、既出資料として明治22年、本古墳群より直刀・小刀・貴金具・鉄鏃⁽¹⁰⁾・銅釧・耳環・須恵器・土師器、大間古墳群より刀類・鉄鏃・勾玉・切子玉・丸玉・耳環が出土したとされ、さらに提瓶が表採されている⁽⁸⁾。これらがC群の調査例と既出資料であり、古墳群の解明には群のすべてを調査した上でなければ総括できないが、本調査をもとに推察してみると、東姥石古墳群・月崎古墳群の築造期は内部構造、規模、小グループの群集墳であることから長峯古墳群の築造時期と大差はないと考えられる。後家山古墳については規模が大きく、C群の先端、平坦面に広がる山麓に位置していることから、東一本柳古墳の様な単独の様相を示し、また、平坦地に点在している上屋敷古墳、下屋敷古墳にも同様なことが推察され、群集墳とこれら点散する古墳との関係は留意したい。

次に古墳を考えた時、集落址、生産遺跡の3者を総括し検討しなければなるまい。そこでC群の集落址はどこにあるかを推測すれば、昭和57・58年と調査された滑津川の下流、平坦地に注ぐ北側に⁽⁹⁾樋村遺跡があり、ここから古墳時代の住居址が273棟検出され、集落の変遷を3区分している。I期はムラの初現期とし77棟。II期は安定期とし91棟、III期は大化の改新等により国家機構の変化が地域に及んだ時期とし33棟検出区分している。この集落の変遷がC群の古墳にどのような変化を生じたかは今の段階では不明であるが、C群の性格を知る手懸りになると思われる。

(羽毛田)

註(1) 佐久市教育委員会 1976 『家地頭第1号古墳発掘調査報告書』

築造年代は、内部主体及び墳丘の構築から7世紀中葉と推定されている。

註(2) 佐久市教育委員会 1983 『下大豆塚1号・2号古墳』

報文中において、「2号墳では、7世紀代とみられる尖根筈被蓋矢式や尖根筈被片矢式の鉄鏃が出土しており……更に

先述した矩形を呈する整ったプラン、高麗尺を単位とする石室の規模などを考え合せると、2号古墳の築造年代は、7世紀中葉～

後葉を想定することができる。1号古墳に関しては……石室の形状・規模から考えると2号古墳とはほぼ近接した築造年代が

与えられるだろう。」としている。

- 註(3) 佐久市教育委員会・佐久埋蔵文化財調査センター 1987『北西の久保—南部台地上の調査—』
第2号古墳の築造年代は、「立地・形状・副葬品等から7世紀後半と推定される。」としている。
- 註(4) 佐久市教育委員会 1972『佐久市岩村田東一本柳古墳緊急発掘調査報告』
- 註(5) 1969 佐久市教育委員会によって調査された。大川 清氏により、「佐久の単独墳の北限である。」という指摘がなされている。
- 註(6) 平賀村誌刊行会 1969『平賀村誌』
- 註(7) 八幡一郎 1978『南佐久郡の考古学的調査』
- 註(8) 1959 佐久市教育委員会によって行われた佐久市遺跡詳細分布調査の際に、大間古墳群より表採された。
- 註(9) 佐久市教育委員会 1985『樋村遺跡 遺構編』

引用参考文献

- 佐久市教育委員会 1967『佐久平ゴルフ場古墳群調査報告書』
- 佐久市教育委員会 1972『佐久市岩村田東一本柳古墳緊急発掘調査報告』
- 佐久市教育委員会 1975『佐久市下前田原古墳群学術発掘調査概報』
- 佐久市教育委員会 1976『家地頭第1号古墳発掘調査報告書』
- 佐久市教育委員会 1980『佐久市後家山古墳調査報告書』
- 佐久市教育委員会 1981『石附遺跡発掘調査報告書』
- 佐久市教育委員会 1983『下大豆塚第1号・第2号古墳』
- 佐久市教育委員会 1984『佐久市遺跡詳細分布調査報告書』
- 佐久市教育委員会 1985『樋村遺跡 遺構編』
- 佐久市教育委員会・佐久埋蔵文化財調査センター 1987『北西の久保—南部台地上の調査』
- 御代田町教育委員会 1987『前田遺跡』
- 平賀村誌刊行会 1969『平賀村誌』
- 長野市教育委員会 1981『長野 大室古墳群分布調査報告書』
- 長野県教育委員会 1983『長野県史』考古資料編・主要遺跡(東北信)
- 長野県教育委員会 1984『長野県史』考古資料編・主要遺跡(中南信)
- 群馬県教育委員会 1981『群馬県史』資料編3 原始古代3 古墳
- 群馬県教育委員会・群馬県埋蔵文化財調査事業団 1983『大釜遺跡 金山古墳群』
- 財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団 1983『上越新幹線埋蔵文化財発掘調査報告—VI—三ヶ尻天王・三ヶ尻林(1)』
- 財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団 1983『埼玉県における古墳出土遺物の研究I—鉄鏃について—』『研究紀要』
- 石井 昌国 1979『古代の刀剣』『日本古代文化の探究 鉄』
- 石野 博信 1984『古墳時代史 9古墳の終末』『季刊考古学 第9号 墳墓の形態とその思想』
- 石野 博信他 1985『季刊考古学 第10号 古墳の編年を総括する』
- 泉森 皎・伊藤 勇輔 1985『遺物が語る大和の古墳時代』
- 岩崎 卓也他 1986『季刊考古学 第16号 古墳時代の社会と変革』
- 大塚 初重 1963『後期古墳の研究』『信濃大室古墳群』
- 大塚 初重・小林 三郎・小平 秀夫 1968『積石塚調査』『信濃 長原古墳群』
- 大塚 初重他 1983『季刊考古学 第3号 古墳の謎を解剖する』
- 大塚 初重・小林 三郎 1984『古墳辞典』
- 大場 磐雄 1951『信濃国の古墳群の性格』『上代文化』第21号
- 神村 透 1970『大室古墳群北谷支群緊急発掘調査報告書』
- 神津 猛 1929『北御牧村八重原の製陶址』『信濃考古学会誌』第1号
- 後藤 守一 1939『上古時代鉄鏃の年代研究』『人類学雑誌』
- 田辺 昭三 1982『須恵器大成』 角川書店
- 土屋 長久 1970『信州佐久平の後期古墳群について』『信濃 III』22—12
- 土屋 長久 1975『信濃佐久平古氏族の性格とまつり』
- 堤 隆 1987『佐久地方における奈良時代を中心とした土器様相』『長野県考古学会誌 55・56号 シンポジウム特集号 信濃における奈良時代を中心とした編年と土器様相』
- 前園 実知雄 1984『律令官人の墓』『季刊考古学 第9号 墳墓の形態とその思想』
- 丸山 竜平 1984『古墳群の変遷』『季刊考古学 第9号 墳墓の形態とその思想』
- 水野 正好 1981『群集墳の構造と性格』『古代史発掘6 古墳と国家の成り立ち』 講談社
- 八幡 一郎 1978『北佐久郡の考古学的調査』 『南佐久郡の考古学的調査』